編集者：河原、所、丹羽、水崎、長屋

岐阜市未来共創WS：Jグループ

GIFU FUTURE TIMES 2040

2040 4月

暮らしたいまち No.1 岐阜市

2025年、私たちは未来の岐阜市において「多様な交通手段の共存」「気候を問わない快適な環境」「大人が楽しそうに働く姿」を求めた。それから15年が経ち、移動の不便さや都心での快適な過ごし方が、市民、企業、行政の「共創」により劇的に進化を遂げた。
中心市街地は広大な歩行者天国となり、移動そのものがエンターテイメントになった。目的地での時間がさらに豊かになり、街全体がエネルギーを生む発電所のようにも機能し、誰もが主役となる2040年の岐阜市の現状をレポートする。

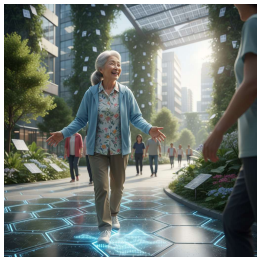
巨大な歩行者天国プロジェクト

中心部への車両乗入禁止とバス無料化により、街は「巨大な歩行者天国」へと生まれ変わった。かつての車道は自転車・歩行者レーンとなり、頭上を物流ドローンが飛び交う。エリア内は韓国街やスタジアムなどにゾーニングされ、移動そのものが楽しみに進化した。「街が賑やかになって本当に楽しい。遊べる街になって良かった」と佐藤健二さん（45）は語る。効率と回遊性が融合したこの空間は、まさに車のない楽園だ。

エネルギーの地産地消プロジェクト

緑溢れる街並みは、実は巨大なエネルギー拠点だ。自然エネルギー活用とスタートアップへの実証実験支援が結実し、建物には「発電する蔦」による壁面緑化、歩道には歩行振動で電気を生む「圧電床」が導入された。太陽光発電と緑化の統合は、気候を問わず快適な屋外環境を作り出している。

かつて独り身で寂しさを感じていた田中よし子さん（78）は、圧電床の上を歩きながら「私の散歩が街の電気になる。公園に来ることが毎日の生きがいになったわ」と語る。市民の健康づくりとエネルギー生産が直結したこのシステムは、緑地化と共に住民の心も豊かに照らしている。



田中 よし子さん

ぎふ「街ごとコワーキング」化計画

かつてシャッターが目立った空き店舗や空きビルは、今や「路地裏オフィス」や誘致企業のサテライト拠点として再生した。特筆すべきは、保育園・病院・介護施設がそれらのすぐ近くに整備されたことだ。職住近接ならぬ「職・育・医」の超近接が、働く世代の負担を劇的に軽減している。

路地裏のオフィスで働く鈴木麻衣さん（30）は、「生き生きとして働いている姿を子どもに常に見せられるのが嬉しい」と語る。大人が楽しそうに働き、子どもがそれを見て育つ。街全体が巨大なコワーキングスペースとなった岐阜市では、世代を超えた交流から新しい価値が生まれ続けている。

鈴木 麻衣さん